

鳥公園 #16

2023.3.17金~3.19日 全5
ステージ

八王子市芸術文化会館
いちようホール(小ホール)

作 西尾佳織 瀧三浦雨林

脚 原田つむぎ 東京テスロップ
プロトミック 秋場清之 橋本の
フラミンゴ

杉山賢 橋本 能島瑞穂 青年団 黒川武彦 モ×ラス

(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団と鳥公園がタッグを組む、
演劇公演第一弾!旧約聖書の「ヨブ記」をモチーフにした鳥公園の
代表作、待望のリクレーション。

八王子
鳥公園
2022-
2023
5年目

演劇のための
長くゆるやかな
アートをインスピレーション

製作 鳥公園
主催 公益財団法人
八王子市学園都市文化
ふれあい財団



ヨブ呼んでるよ -Hey God, Job's calling you!-

リクリエーションにあたって

『ヨブ呼んでるよ』は、「義人の苦難」をテーマにした旧約聖書『ヨブ記』を現代日本に再解釈して描いた鳥公園の代表作（2017年初演／第62回岸田國士戯曲賞最終候補作品）。初演では、現代社会の価値基準によって一方的に量られてしまう存在と、その非常な理不尽と苦難を通し、全ての存在が「ただ存在すること」それ自体の価値を問いかけてきました。

今回のリクリエーションでは、英題「Hey God, Job's calling you!」を添え作品タイトルを更新。劇作・西尾佳織は戯曲のリライトを通して、個別の存在が発する「言葉なき声」を掬い上げます。

また、2018年「鳥公園のアタマの中展」でのリーディング上演を経て演出にあたる三浦雨林は、『ヨブ記』を2023年の視点から多角的に解釈し、本作を舞台上へ再構成します。生演奏による音楽、現代画家と舞台美術家のコラボレーションも取り入れ、ジャンル横断的な演出で現代の受難を描き出します。

『ヨブ記』……旧約聖書に取められている書物。神への信仰篤く恵まれた環境で何不自由なく暮らしていた義人ヨブが、ある日突然まったく謂れない受難に遭って神に問いかける物語。古より人間社会の中に存在していた神の裁きと苦難に関する問題に焦点が当てられている。

『ヨブ呼んでるよ』あらすじ

希帆はシングルマザーの風俗嬢だ。育児放棄し、仕事も欠勤し、転がり込んだ男の部屋で酒浸りになっている彼女の元に、希帆の兄、大家、兄の弟分のチンピラが代わる代わる訪れては大量の「正しい」言葉を浴びせかける。だから彼女は夢に逃げ込む。

夢の中で、子供の頃からよく会うオジサンがいた。「たかをちゃん」と名乗るそのオジサンは子供のようで、彼といるときは希帆もこのびのび存在できた。だがある日たかをちゃんが、「自分は大田区に住む56才だ」と語り出す。自分の夢の登場人物だとばかり思っていたたかをちゃんは、現実の存在だった。「妹をアイして母さんに怒られた」というたかをちゃんの言葉を呼び水に、とうとう夢にも、希帆の虐待と近親相姦の記憶が侵入してくる。

旧約聖書のヨブはよかった。自分の受難を訴える言葉を持っていて、訴える相手の神もいた。でも希帆は言葉を持っていない。声なき人の声は、どのようにこの世界に出現し得るだろう？

日程 2023.03.17(金) - 03.19(日) 全5ステージ
03.17(金) 13:00- *1 18:00-
03.18(土) 13:00- 18:00- ◎ *2
03.19(日) 13:00-

※受付開始は開演1時間前、開場は開演30分前
*1 ポストパフォーマンストーク「ゆるAIRの現在地〜八王子と鳥公園の一年目」 *2 ポストパフォーマンストーク「『ヨブ呼んでるよ』のこれまでとこれから」（登壇者等の詳細は鳥公園ウェブサイトへ） ◎=記録映像の撮影がごさいます

会場 八王子市芸術文化会館 いちょうホール（小ホール）
192-0066 八王子市本町24-1
www.hachiojibunka.or.jp/icho/

・車の場合：八王子ICから
八王子インター第2出口より国道16号線を八王子市街方面・横浜方面へ、浅川橋を渡り大横町交差点を通過後、いちょうホール西を左折。インターから約15分。
※いちょうホール駐車場は有料。（20分100円（1日最大900円）約100台収容）
・電車の場合：JR八王子駅・京王八王子駅から
JR八王子駅より徒歩20分。

JR八王子駅北口6〜10番・京王線京王八王子駅2,3番のりば「横山町三丁目」下車徒歩5分または「八日町一丁目」下車徒歩3分。※市街地循環バス JR八王子駅北口6番、京王八王子駅2番のりば「みずき通り」下車徒歩4分、または「いちょうホール北」下車徒歩2分。

チケット 料金(前売・当日)

一般3000円 友の会2700円 ユース(25歳以下)2000円
※全席指定／未就学児入場不可／ユースは公演当日要年齢証明書／車いす席あり（席数限定・要事前予約）
※友の会については、(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団ウェブサイトをご覧ください。

発売日 友の会：12.14(木) 一般：12.17(土)

取り扱い

- 窓口 9:00-19:00
いちょうホール 042-621-3001（月曜休館・祝日の場合は翌平日休館）
南大沢文化会館 042-679-2202（月曜休館・祝日の場合は翌平日休館）
学園都市センター 042-646-5611
- J:COM ホール八王子 042-655-0809
- 電話予約 9:00-17:00
(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団 042-621-3005
- インターネット予約
(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団ウェブサイト www.hachiojibunka.or.jp/ticket/
※ご利用には事前に登録が必要です。

作 西尾佳織(鳥公園)
演出 三浦雨林(鳥公園アソシエイトアーティスト/隣屋/青年団)
出演 原田つむぎ(東京デスロック/ストミック) 秋場清之(情熱のフラミンゴ)
杉山賢(隣屋) 能島瑞穂(青年団) 黒川武彦(モメラス)
演奏 恒吉泰侑
スタッフ 美術 北林みなみ 中村友美 音楽ディレクション 恒吉泰侑 三浦雨林
照明 中山奈美 音響 櫻内憧海(お布団/青年団) 衣裳 永瀬泰生(隣屋)
舞台監督 鐘築隼 宣伝美術 鈴木哲生 制作 鳥公園
合同会社 syuz'gen(谷陽歩 大川智史) 演劇ネットワークまぼろち

製作 鳥公園
主催 公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団
助成 令和4年度 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) 独立行政法人日本芸術文化振興会

演劇のための長くてゆるやかなアーティスト・イン・レジデンス
「八王子と鳥公園の一年目」

プロデューサー 米倉楽(公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団)
ディレクター 荻山恭規(公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団)



あなたのよさを
あるけるまじ。
八王子

公開稽古 『ヨブ呼んでるよ -Hey God, Job's calling you!-』公開稽古を開催！創作の様子を一般公開します。本作のリクリエーションの道のりに是非お立ち会いください。

日時 2023.3.3(金), 4(土) 両日とも13:00-16:00

会場 八王子市芸術文化会館 いちょうホール（小ホール）

料金 無料(要事前申込・定員あり)

申込・詳細 鳥公園ウェブサイトへ

お問合せ 公演に関して

鳥公園 #16 制作部 (担当：谷・大川)

E-MAIL seisaku.job2023@syuzgen.com

TEL 03-4213-4290 (平日 10:00-18:00)

「八王子と鳥公園の一年目」に関して

(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団
芸術文化振興課 (担当：荻山)

192-0066 八王子市本町24番1号

E-MAIL geishin78@hachiojibunka.or.jp

TEL 042-621-3005 (9:00-17:00)



☞鳥公園ウェブサイト
www.bird-park.com



☞(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団
ウェブサイト
www.hachiojibunka.or.jp/play/yuru-air

2.



3.



4.



5.



鳥公園 twitter+instagram
@torikouen

上記アカウントでは本公演のビジュアルイメージの変遷・展開を連載しています。チラシ作成後も、公演までさらにイメージが深まっていく様子を一緒に追いかけてみてください。 1. 穴のイメージ 2. 穴のイメージ 3. やぎ 4. ねんど 5. 話す artwork = Minami Kitabayashi

『ヨブ呼んでるよ』について

西尾佳織インタビュー

言葉を持たない人の言葉

——今回『ヨブ呼んでるよ』が再演されるわけですが、この作品で取り組んでいることをお話しいただけますか。

「言葉を持たない人の言葉」について考えたっていうのは初演のときからずっとあります。今回はリクリエーションにあたって、1シーンだけ戯曲を新しく書き直そうとしてるんですけど、そこがその「言葉を持たない人の言葉」についてのシーンで、そこで主人公の希帆が話す言葉っていうのが一体何なんだろうという部分がいまだに考え中です。

聖書の世界って結構男性に中心が置かれてると思うんですね。『ヨブ記』のヨブは恵まれたところから転落するけど、すごく言語化能力のある人で、そもそも発言権もあって、ちゃんと発言を拾ってもらえている。じゃあ主人公が女の人だったらどうなんだろう、とか、生まれたときからずっとと苦しい環境にいて、自分がいま置かれている状況がこういうものであると、俯瞰して対象化できる能力とか条件が整ってない人だったら、どうやって救われるんだろうということを考えた。

そういう問題設定をしている私自身はやはりとても恵まれていて、言葉を持っている側ではあると思うんですけど。でも2020年に出産をして、子供がいる状態になってみたら、それまでの私は「自分の時間やエネルギーを管理して、個人としてバリバリ働く」っていうところになんの躊躇もなく入れていたんだなということに気がついて。そこからちょっと外れてしまったと感じるようになっていいるいま、どう言葉を発したらいいのか。活発な活動の場所や言論が交わされる場所、あるいは劇場という場所に対して、すごくしらせてしまっているところがあって、作品のテーマについての切実さが初演の時から変わっているなと感じています。

——活発な活動や言論の場所、あるいは劇場に対してしらせているという感覚について、もう少しお聞きしたいです。

今回戯曲をリライトしながら、李静和さんの『求めの政治学』¹という本を読み返してるんですけど、そこに、マジョリティとマジョリティは出会えるし言葉も通じるけど、マイノリティとマイノリティはそもそも出会えないし、出会ったとしても言葉が通じないみたいな話が書かれていて。私はそれを劇場文化にすごく感じています。アーティストってたぶんどこかしら世の多数派に添うことが出来ないと感じる部分があって、劇場にやってくる人たちも、そういうマイノリティ性に共感的・親和的であることが多いと思うんですね。でも一方で、劇場に来られる時点である種のマジョリティというか、その作法とかに乗れる人であるとも思うんです。つまり自分ではマイノリティ性に立ちながらマイノリティ（性）に対峙しているつもりでも、実際に起こっているのはマジョリティ同士の交流になってしまっている面があるというか。そこへの無自覚さが、劇場コミュニティの狭さになっているんじゃないか。

想像力を駆使することの限界

——劇場が結局はマジョリティのための場所になってしまっていると。そこから抜け出すためには何が必要なのでしょう。

たとえば、他者に対する想像を働かせる、想像力を持つ、というようなことがよく言われると思います。たしかに想像力は大事なんだけれど、いま流通している「想像力」で通じ合えるのって、元からかなり同質性の高い人同士のような気がします。どっちかっていうとむしろ「想像してもしきれないことがある」ということを考えるのが大事なんじゃないか。

『求めの政治学』の中に、想像力を発揮すると体が傷んじゃうみたいなことが書かれていて、それってどういうことなんだろうと。静和さんの言い方だと、「先進国」の人間はメディアもたくさんあるから想像力を外へ、他者へパッと伸ばすことが習慣化しているのに対して、「第三世界」の人々は感受性が生を不可能にしないよう、なんとか死なずに生きていくために想像力が制限されざるを得ないというんですね。後者は言葉に到達しえない状況にあるんだけど、前者は前者で、想像力の過剰のために言葉を喪失している。想像力が、貧困なのではなく過剰で、そのために言葉が生の現場性から疎外されて空中戦みたいになっている。それがすごく、ピンとききました。

いま、現場性から離れた言葉＝俯瞰の位置に立って発される言葉を、疑ってます。俯瞰するためには普遍的な価値みたいなのところに立たないといけなくて、それはある程度共通の価値観や言語というものを必要とする。でもその共通の基盤が前提にしている近代的個人って、いまの私の感覚からするとかなり規格化されたものというか、個を捨象して成立しているものだったんだなあっていうのを産後思うようになって。前は違和感なく「私は個人として考えたり喋ったりしている」と思っていた状態が、いまは、支配的な価値観や言語の体系に乗った状態、自分の個別の身体や状況にそぐわない状態と感じられて、同じ感じに話すことが難しいです。

『求めの政治学』の語りはすごく意味を取りづらんだけど、それはたぶん、「普遍」に抵抗するために、何とか語り方を発明しようとしてるんですね。そういう風にしないと、そこで均されているものからこぼれてしまう個の大変さとか苦しみたいなものに触れることはできないということなのかなと。

演劇で想像力を駆使するというのも、括弧付きの狭い「普遍」の上だけで洗練された共通言語のやり取りということでは仕方がない気がするんです。そうではなくて、むしろ想像力を駆使するということの限界について……そこがやれたらいいんじゃないかな、と思っています。

他者を代弁するのではなく

——想像力の限界を考えるとというのはとても大切なことだと思います。しかし、そのように考えると、極端に言えばそもそも他者を想像で描くこと自体に問題があるという話になってくる気もして、そうすると、作家が（取材に基づいたものであれ）他者を表象するのではなく、他者自身に出演してもらい、ある種のドキュメンタリー演劇のようなやり方がよいのではないか、という考え方もありうる気がします。でも西尾さんの場合はそれとも異なる道を行こうとしているのですよね。

そうですね。ドキュメンタリー演劇という方法で可能になることも、もちろんあると思うんですけど、それが有効なのは、当事者が語りうる、語りたい事柄について、これまで語られる／聞かれる場が十分に用意されてこなかったケースなのかなと。でも当事者が語りえないこともある。言葉にしまったら、生きていかれないようなこと。

当事者のことは当事者が語るべきであって、非当事者が安易に語ってはいけないう感覚があると思うんですけど、でも当事者しか語れないとしたら、当事者が語れないことはパブリックには「ない」と同じになってしまう。どうしたら他者を勝手に理解したことにして代弁してしまわず、俯瞰では届かないことを書けるのか？　そこに、フィクションとしての演劇の余地があるんじゃないかと思っています。語れない出来事の中身を明らかにするという意味ではなくて、その出来事を語れないまま抱えて生きている人の「ひとりの時間」を、観客が見る、ということを考えています。

もうひとつ、暴力とか害されるということが、人の何を棄損するののかということを考えていて。無傷なわけないと思うんですよね。暴力を受けた人は、本来ならそうではなかったはずの形に変えられてしまう。その状態込みで「その後」を生きていかなければいけないことまで含めて、被害だと思えます。例えば希帆は、周りからするとすごく「厄介」な人になってしまっている。だから孤立しているし、子供のネグレクトのような形で、次の暴力を生んでしまっている。それは元をたどると彼女のせいじゃないんですけど。その、与えられてしまった「厄介」さも含めて一緒にいるってどういうことか。例えば私なら希帆とどういられるか、あるいは私が希帆だったら、誰がどんな風に私の隣にいてくれるだろうかと考えてます。それはきっと全部ハグみたいな感じじゃなくて、クソ面倒くせえて思いながら、そう思ってしまう側の狭量さもなしにしないで一緒にいるみたいなことだと思うんですけど。

¹李静和『求めの政治学：言葉・這い舞う鳥』岩波書店、2004年
(2022年12月7日収録、インタビュー・構成：江口正登/合同会社syuzen)

西尾佳織 1985年東京生まれ。劇作家、演出家。幼少期をマレーシアで過ごす。東京大学にて寺山修司を、東京藝術大学大学院にて太田吾吾を研究。2007年に鳥公園を結成以降、全作品の脚本・演出を担当してきたが、2020年より劇作、主宰業に専念。作品とアーティストと社会がより長いスパンで成熟していけるように、創作の環境そのものからつくり直そうと試行錯誤中。2014年に『カンロ』、2018年に『ヨブ呼んでるよ』、2020年に『終わりにする、一人と一人が丘』で岸田國士戯曲賞にノミネート。近年は、からゆきさんのリサーチにもライフワーク的に取り組んでいる。

鳥公園 2007年7月に劇作家、演出家の西尾佳織が設立。社会の中で人と人のあいだに引かれる境界線を、さまざまな形で問い直す作品をつくらせている。2019年に〈複数性の演劇〉＝持続可能で本当にインディペンデントな創作活動に向けてのステートメントを発表し、2020年度より和田ながら（したため）、蜂巣もも（グループ・野原）、三浦雨林（隣屋／青年団）の3人の演出家をアソシエイトアーティストに迎えて、西尾は劇作と主宰業に専念する新体制に移行。創作活動の基盤を整える「お盆部」とともに、活動報告会や決算報告会、アンニュアルレポート作成など、プロセスの公開にも積極的に取り組み、作品づくりと創作環境の構築を同時進行で進めている。

演劇のための長くてゆるやかなアーティスト・イン・レジデンス

「八王子と鳥公園の一年目」について

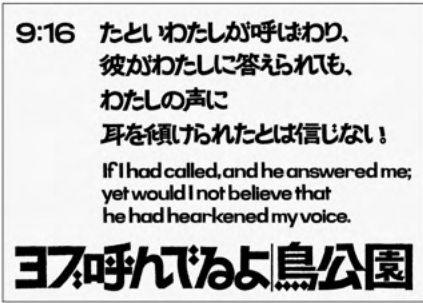
2022年度から少なくとも2年、もしかしたら3年、鳥公園が(公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団とタッグを組んで、「演劇のための長くてゆるやかなアーティスト・イン・レジデンス」（通称「ゆるAIR」）と題し、複数の創作活動～作品発表を継続的に進めていくことになりました。

その公演第一弾として、2023年3月17日-19日に鳥公園の代表作『ヨブ呼んでるよ』を三浦雨林による新演出で、いちょうホール（小ホール）にて上演します。戯曲も初演時から一部改訂し、『ヨブ呼んでるよ -Hey God, Job's calling you!-』としてリクリエーションに臨みます。

また、リクリエーションの道のりの中で本作を再検証するにあたり、その手前の勉強会として、専門家を招いた関連ワークショップを一般公開で行いました。上演の2週間前には、創作の様子を観客にお見せする公開稽古も予定しています。鳥公園が八王子のまちと共にあゆむ創作活動1年目のチャレンジをぜひそのプロセスまでご注目ください。

『ヨブ呼んでるよ』初演から、リクリエーションに至るまで

2017. 03. 初演（会場：アトリエ劇研（京都）、こまばアゴラ劇場（東京））



05. 演劇批評誌『紙背』創刊号 戯曲・劇評掲載

2018. 01. 第62回岸田國士戯曲賞 最終候補作品にノミネート

02. 「鳥公園のアタマの中展」にてリーディング上演（演出：三浦雨林）

リクリエーションで演出を担当する三浦雨林が公募枠で選出、初めて鳥公園の公演に参加。



2019. 08. 鳥公園新体制についてのステイトメント発表

11. クラウドファンディング実施

「新体制は、鳥公園が本当に〈場〉としての公園になっていくことだと思っています。鳥公園の活動を通して、顔の見える新たなパブリック（親密な公共圏）をつくっていきます。」（西尾佳織／クラウドファンディングで示した「今後の展望」より）

12. 新体制に向けたキックオフミーティング実施

2020. 04. 和田ながら（したため）、蜂巣もも（グループ・野原／青年団）、三浦雨林（隣屋／青年団）の3名の演出家をアソシエイトアーティストに迎え、西尾は主宰業と劇作に専念する新体制がスタート。

「戯曲は本来、多様な上演の可能性を孕んだ種のようなものです。複数の演出家とチームを組むことで、戯曲と上演の関係性が広く想像され得る状態をつくりたい。」（西尾佳織／「鳥公園 新体制についてのステートメント」より）

2021. 02. 日本劇作家協会「戯曲デジタルアーカイブ」戯曲掲載

2017年初演時の戯曲（PDFデータ）、作品や作家の詳細情報を掲載。現在（2023年1月）もウェブ上でご覧いただけます。（右記QRコードより）



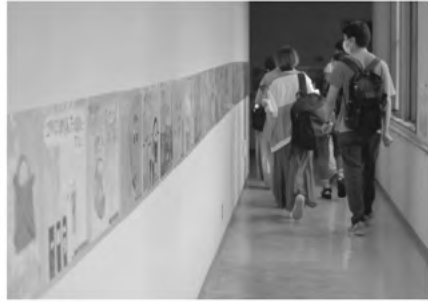
2022. 04. (公財)八王子市学園都市文化ふれあい財団とタッグを組んで“ゆるAIR”がスタート

05. 『ヨブ呼んでるよ』関連ワークショップを開催

演出の三浦がファシリテーションを担当する旧約聖書『ヨブ記』に関するWS、劇作の西尾がファシリテートするセックスワーカーの表象を考えるWSの二つを開催。クリエイションメンバーと一般参加者が交じって、それぞれのテーマについて思考を深めました。

08. 八王子市・戸吹クリーンセンター見学

作品コンセプト・美術プランの参考のため、演出の三浦、劇作の西尾、美術チームの北林と中村を中心に来訪。焼却のために実際に使用しているクレーンや人の手で行われているゴミの分別等を見学しました。



©三浦雨林

2023. 02. 「鳥公園のジコショウカイ展」@八王子学園都市センター

2/5(日)-7(火)開催。八王子のみなさんに、鳥公園という劇団の魅力を知ってもらうための展示とイベント「鳥公園のジコショウカイ展」を開催します。（詳細は八王子市学園都市文化ふれあい財団ウェブサイトへ）

03. 『ヨブ呼んでるよ -Hey God, Job's calling you!-』公開稽古

『ヨブ呼んでるよ -Hey God, Job's calling you!-』公演